

諸外国における教育動向における総合的研究 —イギリス・フィンランド・フランスにおける授業アーカイブを通じて—

久世 均, 齋藤陽子

岐阜女子大学文化創造学部

(2012年10月2日受理)

Synthetic Research into the Educational Trends in Foreign Countries —England, Finland, and France Archive of Leading Lessons—

Department of Cultural Development, Faculty of Cultural Development,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501-2592)

KUZE Hitoshi, SAITO Yoko

(Received October 2, 2012)

岐阜女子大学（以下「本学」とする。）では、文化創造学部において平成21年度より「海外教育視察研修」を実施し、イギリス、フィンランド、フランスの3カ国を訪問し研修してきた。特にこの研修では、教員を目指す学生を中心に、現在教員養成に求められている「教職の専門的知識・技能」と「実践的指導力」の育成を目指し実施してきた。また、本研修において、海外の授業を参観し、記録・保存し、その後授業分析をする総合的な授業アーカイブに重点を置き、実践した。

授業アーカイブは、参観した授業の記録とともに、授業研究に関連する情報を総合的に記録し、管理し、保管していく手法である。一方、授業研究は、授業アーカイブした教育資料を基に授業分析をはじめとする授業改善への取り組みである。これらの授業アーカイブ手法を通じて授業研究をすることにより、教師の「暗黙知」の獲得が促進され、実践的な授業力の向上へとつながる。また、その認識を広げるため、また後世へ伝えるために、現代における優れた授業の授業アーカイブを行うことが必要であると考え、これらの実践を重ねてきたのでその結果について報告する。

〈キーワード〉 教員養成, デジタルアーカイブ, 教育実践資料, 授業アーカイブ

1. はじめに

本学では、平成21年度より文化創造学部において、「海外教育視察研修」を実施してきた。文化創造学部・初等教育学専攻では、教員の養成を行っており、教員養成では、近年、教職の専門的知識・技能と、実践的指導

力の育成を求められている。この求められる資質・能力の育成を目的として海外教育視察研修を実施している。海外の文化に直接触れ、教育を視察し、海外の授業を記録として残し、後に授業分析を行うことを通して、教員としての専門的知識・技能を身に付けることをねらっている。

初年度の平成21年度はイギリス、22年度はフィンランド、23年度はフランスでの研修を行った。イギリスは、日本がイギリスの教育評価制度を参考にしていること、フィンランドはOECD生徒の学習到達度調査（PISA）において調査結果が上位であること、フランスは教育の制度に特徴があり、義務教育段階から落第制度があることなど、日本の教育を考える際に、有益な情報を得ることができる特徴がある国を選定した。

これら3カ年の海外教育視察研修の概況を報告する。

2. 諸外国における教育動向と研修概要

(1) イギリス

イギリスは、アメリカ、日本などの先進国と同様、国際社会をたくましく生きる人の育成を目指しており、とりわけ「1988年教育改革法」は、その趣旨を明確に表し、イギリス教育体制を変革させた。

サッチャー政権時代に教育改革を推し進め、ナショナル・カリキュラムの作成や、その到達度をみるための「全国テスト」の実施を行った。ブレア時代にはそのナショナル・カリキュラムや全国テストを強固に推し進めた。このナショナル・カリキュラムは日本の学習指導要領と類似しているといわれている。

そのようなイギリスの教育視察を次のような日程にて行った。

研修期間は平成22年2月23日(火)～28日(日)の6日間で、参加学生は1年次2名、3年次12名の合計14名であった。

視察地はイギリスのロンドンで、教育を学ぶにはその地域を知ること重要と考え、地域文化を学ぶために、表1中にある文化施設も視察した。

表1. イギリス研修視察先

日程	研修内容
2/24	・大英博物館・ロンドン塔 ・グリニッジ天文台
2/25	・国会議事堂（ウェストミンスター宮殿） ・ウェストミンスター寺院 ・ナショナルギャラリー
2/26	・小学校視察 Stockwell Park Secondary School
2/27	・各自企画研修

(2) フィンランド

次年度の平成22年度には、OECDによる生徒の学習到達度調査において好成績を収めているフィンランドの教育を学んだ。

フィンランドの教育政策において中心基盤となるのは、年齢、居住地、経済状況、性別、母国語などに関わらず、全ての国民に教育を受ける平等な機会を提供することである。そのため就学前教育、基礎教育、後期中等教育は無料の原則をとっている。学費、福祉サービス、給食はこれらの教育機関において無料提供され、必要な教材や教科書も、就学前から基礎教育までは無料である。

フィンランドの教育は教育省（Ministry of Education）がその責任を担う。その下部組織としてフィンランド国家教育委員会（National Board of Education）が存在する。しかし、国家教育委員会は、教育省の下部組織といえど、一定の独立性を有している。

教育省は、教育条件の整備や教育に関する制度構築、権限規定などを行っている。

一方、国家教育委員会は、ナショナル・コア・カリキュラムの策定や国レベルでの教育評価など教育の方針や内容・方法などの決定を行っている。

このようなフィンランドの教育を学ぶために、国の教育方針を決定している国家教育委員会を訪問し、フィンランドの教育に関する

講話を実施した。また、前年度と同様に教育は地域の文化の基に成り立っているとの考えに立ち、フィンランドの文化を学ぶために、文化施設も視察した。

フィンランドの研修期間は平成23年2月20日(日)～25日(金)の6日間であり、ヘルシンキを中心としたが、学校視察はタンペレの小学校を視察した。なお、参加学生は、1年次8名、2年次3名、3年次2名、4年次9名の合計22名であった。

表2. フィンランド研修視察先

日程	研修内容
2/21	・ウスペンスキ寺院 ・ヘルシンキ大聖堂 ・国家教育委員会 講話 ・国立公文書館
2/22	・小学校視察 AMURI SCHOOL
2/23	・各自企画研修

(3) フランス

3年目の平成23年度はフランスの視察を行った。日本の近代学校教育制度は、明治5年(1872年)の「学制」発布に始まる。全国を8つの大学区に分け、それぞれの大学区を32の中学区に分け、全国に256の中学区があったといわれている。それをさらに小学区に分け、全国53,760の小学校があったとされている。このように全国を学区に分けていく考えは、学校を全国に均等に設置していくという発想に基づいており、子ども達が自分達の住んでいる地域の学校に通うことを可能とした。この仕組みは、フランスの制度をモデルとして生み出されている。現代における日本の教育の礎となっているフランスの教育を学ぶことは、現代、さらには次の世代の教育を考えていく上で重要である。

フランスは国家としての歴史も古く、その歴史を学ぶことができる文化遺産等を視察す

ることはその国の教育を学ぶ上では欠かせない。ゆえに文化施設の視察も併せて行い、教育の土台を肌で感じ取った。

フランスでの研修期間は平成23年2月15日(水)～20日(月)の6日間であり、参加学生は、1年次11名、2年次12名、3年次2名、4年次3名の合計28名であった。視察施設等は次のとおりである。

表3. フランス研修視察先

日程	研修内容
2/16	・ルーヴル美術館
2/17	・小学校視察(ウォルドルフ学校) ECOLE RUDOLF STEINER ・フランス国立古文書館
2/18	・各自企画研修
2/19	・各自企画研修

フランスで訪れたルーヴル美術館と国立古文書館では、視察の際に専門学芸員を同行者として依頼し、学芸員による説明を聞きながら視察を行った。さらに、国立古文書館では、資料の保存と管理を学ぶために、バックヤードの見学も行い、フランスでの実態を学んだ。

3. 授業アーカイブを通じた授業研究

(1) 教員の専門性と授業研究

教職の専門性とその中核をなす「実践的指導力」は、大学における養成教育→教育現場での初任者研修→現職研修の各段階を通じて獲得され、形成される。そのうち大学における養成教育は、その位置づけと性格からみて「完成教育」ではありえず、あくまでも「準備教育」にとどまらざるを得ない。言い換えれば、教職の専門性と「実践的指導力」は、実際に子どもと向き合いながら教育実践を重ね、教師集団の中で相互に授業研究をし合うことを通じて、本格的に、そしてより豊かに形成されていくものである。また、学習指導

要領に示された、教育のねらいである「生きる力」を育成するためには、教科の授業を中心にして、知の側面である「確かな学力」の定着を図ることが求められている。そのためには、授業を行う教師自身の授業力の向上が不可欠である。授業力の向上には、一人ひとりが自らの授業を振り返り、課題を明らかにし、授業改善に努めることが必要である。そのためには授業研究が重要な役割を果たす。

ここでは、授業研究における授業アーカイブのための関連教育資料について提案する。

(2) 授業アーカイブとその関連教育資料

授業アーカイブは、ビデオ映像だけをアーカイブしても意味がない。その授業の背景や授業の様子を記録するための関連教育資料の整備が重要である。授業アーカイブのための関連教育資料として、マネジメントサイクルで考えると、計画（P）段階では、授業を行うためにシラバスに基づき授業の構想（学習指導案）や板書計画などを必要とする。

また、実施（D）段階では、授業を実施し、授業分析のための資料収集を行う。授業は一過性の面があり、一見しただけでは捉えにくい。そこで授業の事実を捉えるために、文字化された記録だけでなく、メディアによる記録も収集し、分析の際に事実がはっきりと分かるようにする。

次に、評価（C）段階が授業分析である。図1のような収集した授業記録に基づき、一つひとつの事実の持つ意味を明らかにすることを通して授業における課題を明らかにする。課題を明らかにすることで授業改善が図れるとともに、授業を行うための力量の向上が図れる。従って授業分析は授業研究において大切な位置を占める。最後に、改善（A）段階では、成果と課題に基づいて具体的な改善策を考える。このような、PDCAサイクル

活動原簿表

教材 drama

2010年 2月 26日

時	分	T先生	S先生	行動記録メモ T	行動記録メモ S
0	0	1		Focus on the coin. Anybody can start now.	コインに集中して、誰が始めてもいいですよ、はい。
5			7c		One Two Three 一 二 三
10			7c		Four Five 四 五
15			7c		Six Seven Eight Nine 六 七 八 九
20			7c		Ten Eleven Twelve Thirteen 十 十一 十二 十三
25			7c	Ahhhhh! Good.	あー！ いいですよ。
				That was good. Clap your hands. Come on. (clap) Very good. So fifteen.	良かったですよ。拍手して。ああ、拍手！ ぶは素晴らしい。十五ですね。
35		1		Will take fifteen. I'm going to add one thing else now, to that.	十五からいいですよ。今からこれにも一つバーンと加えますよ。
40		1		If Karis says a number, and then, you are not able to say one, neither is Melissa.	カリスが数言った場合、右隣のあなたも、リサやミサも、両方とも数字とができません。
45		3		So, it's got to go across all the time. Yes?	つまり、常に隣の隣の人の所にならねば。いいですか？
50		5c		Because if if somebody besides you says, and then you have to go. But, fifteen is good.	つまり、隣の人が言った場合は、それではない、はいです。でも、十五はいいですね。
55		2		It means that we've got four goes and we want to hide it up. All eyes on the coin... One!	お、4回チャンスが別あります。この順序でやりますよ。みんな、コインを見て……ー！

図1. 授業記録

を基本に教育資料の構成することが必要である。

(3) 多視点授業映像記録

HDビデオを使って授業を記録するものである。音声とともに教師や児童の様子を映像で再現できるところに音声記録との明確な違いがある。特に、本学では、デジタル・アーカイブ手法を活用した多視点授業映像記録を行っている。多視点授業映像では、従来の単視点映像に比べて、児童生徒の様子がよく分かり、授業分析するための記録として重要である。

(4) 授業分析資料の構成

教科や学年などのグループまたは学校全体で取り組む授業分析では、参観者のそれぞれ



図2. 多視点授業映像

が持っている経験則に従って授業を参観し、授業を分析するだけではよりよい授業分析にはならない。特に、授業経験のない学生が、より客観的な授業分析を行うためには、資料に基づいた授業の分析が大切になる。

資料に基づく授業分析を行うためには、学習指導案、授業評価記録の結果など文字化された資料が必要になる。それと共に、授業者や学習者の非言語活動（文字化された資料では読み取ることができない活動）を読み取るために、授業中における授業者や学習者の様子を収録したビデオ記録も用意し、併用しながら分析に臨むことが重要である。

授業分析は、授業改善を行うために、学習指導案、速記録、逐語記録、授業評価記録、多視点授業映像記録等を基にして行われる。分析の仕方によって、量的分析と質的分析の二つに分けることができる。

①量的分析

量的分析とは、教授活動や学習活動をいくつかのカテゴリー（図3）に分類し、それらのカテゴリーの出現頻度を分析するものである。量的分析では、あらかじめ設定された分析の「ねらい」を基に授業中の事象を分類することから、授業改善に向け客観的な示唆を得ることができ、授業の全体像をつかむことができる。

- ・授業者、学習者の行動項目を設定し、そ

カテゴリー・システム

自発	教師の始めた会話	1 提示			
		2 指示			
		3 せまい質問			
		4 広い質問			
応答	教師の反応	5 受容	5a	アイデア	
			5b	行動	
			5c	感情	
			5d	視聴	
		6 拒否	6a	アイデア	
			6b	行動	
			6c	感情	
応答	児童の反応	7 反応	7a	対 教師	予測可能
			7b		予測不能
			7c	対 児童	
			7d	感情	
		8 活動	8a	個人	
			8b	グループ	
		9 視聴	9a	対 教師	
			9b	対 児童	
		10 拒否	10a	対 教師	
			10b	対 児童	
自発	児童の始めた会話	11 発言	11a	対 個	
			11b	対 全体	
その他		12 沈黙			
		Z 無関係			

図3. カテゴリー

れを数量化（項目別の出現頻度・割合など）する。

- ・持続時間、頻度、度数に焦点を当てる。
- ・集団全体を焦点化する。
- ・統計量に基づくものである。

②質的な分析

質的分析では、授業中の授業者と学習者の発言や動作などの記述や記録に基づいて分析が行われる。このことにより、授業改善へ向けて、より実的な示唆を得ることができる。

- ・授業事象・現象をありのまま記述・描写し、教師の意図や指導の手立てを比較する。
- ・発言内容、活動内容のカテゴリー化や順序性に焦点を当てる。
- ・個人を焦点化する。
- ・記述や記録に基づくものである



図4. イギリスの授業

4. イギリスによる授業アーカイブ

今回授業分析した学校は、イギリスのロンドン郊外に位置する“Stockwell Park High school”である。この学校は11歳から16歳の年齢の児童・生徒が約1,000人が通っている。

子ども達の出身国は様々であり、多様な言語を母国語としている。このような多民族、多文化の子ども達が通う学校の授業を多視点授業映像記録し、コミュニケーション分析をした。コミュニケーション分析は、フランダー

教師の発言	後の発言																									統計	
	1	2	3	4	5a	5b	5c	5d	6a	6b	6c	7a	7b	7c	8a	8b	8c	9a	9b	9c	10a	10b	11a	11b	12		Z
1	57	21	5	3			1	8				3	2	4											1		104
2	13	23	8	2			1	1	13			1	13	12											1		89
3	6	2	8					1	5				12	2		3											39
4			1	1									2	7	1												12
5a		1	1																						3		5
5b		1	2	1			1	1	2							1											9
5c	11	19	3	2				2	8					1	4	9									3		62
5d	1	2	1	1					1	1				2													9
6a		1								2																	3
6b			1																								1
6c				1				1			1																3
7a		3	2	3	1			1	8				3	1													20
7b		1	3	1			1	1	3	2				3	1												17
7c		2	2	3	1				12			1	1		21												43
8a																											0
8b		9	8	2				1	8						1	229											258
8c																											0
9a																											0
9b																											0
10a																											0
10b																											0
11a		4			1	1	1	1																			8
11b																											0
12																											1
Z																											0
統計	104	89	39	12	5	9	63	9	3	1	3	20	17	43	0	258	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	684

図5. 授業分析結果

スの授業分析といわれ量的分析の代表的なもので、1970年代にフランダース (Flanders) によって考案された分析法である。授業の流れを、5秒ごとに区切り、先の発言と後の発言を図3の分析カテゴリーで分類して授業の雰囲気を明らかにするもので、今回イギリスの授業を、図1～8のように授業分析を試みた。

また、この授業分析から各領域における特質を抽出し、図5のようにまとめた。

図5の分析結果を、図6と図7の領域と領

領域の説明 (VICS)	
教師の発言	後の発言
1	2
3	4
5a	5b
5c	5d
6a	6b
6c	7a
7b	7c
8a	8b
8c	9a
9b	9c
10a	10b
11a	11b
12	Z
統計	

図6. 授業分析における領域の抽出

領域の説明	
A	情報や意見の提示、指示、質問など教師のはじめの発言。教師が長い間はなし続けていることが特徴。教師と生徒間の相互作用を示す領域ではない。
B	教師のはじめの発言に受容が拒否に入る。教師の応答としての発言が続いていることを意味している。
C	教師のはじめの会話に続く生徒の会話すべての会話が含まれる。
D	教師の応答としての発言に続いて、教師のはじめの発言がなされている。
E	教師の受容行動の継続を示す。アイディア、行動、感情の広範な受容とこれらの言語的なパターンのいずれから他のパターンへの移行も含まれる。
F	教師の受容行動に続いて、教師の拒否行動が生じている。
G	教師の受容的発言に続く生徒の発言を示す。
H	教師の拒否行動に続いて、教師の受容行動が生じている。
I	教師の側の広範にわたる拒否行動が含まれる。アイディア、行動、感情の拒否と、これらの行動のいずれから他のパターンへの移行も含まれる。
J	教師の拒否的な発言に続く生徒の発言すべてが含まれる。
K	生徒の応答行動に続いて、教師のはじめの行動を指す。
L	生徒の応答に、教師の受容が続いている。
M	生徒の応答を教師が拒否している。
N	教師、あるいは他の生徒に対する生徒の広範な応答、または活動を示す。
O	生徒の応答発言に生徒のはじめの発言が続いている。
P	生徒のはじめの行動に教師のはじめの行動が続いている。
Q	生徒のはじめの会話に続いて、教師の受容がなされる。
R	生徒のはじめの会話に対する教師の拒否を示す。
S	生徒のはじめの発言に続いて、生徒の応答としての発言がなされている。
T	教師あるいは他の生徒に向けての生徒のはじめの発言が含まれる。
U	沈黙か混乱を表す領域。

図7. 領域の説明

域の説明に当てはめると次のことが分かる。

- ・Nの領域である児童・生徒の活動が、229ポイントと、非常に多いことが分かる。このことは、本授業の多くが児童・生徒の自主的な活動であったと分かる。
- ・Dの領域は、これらのNの活動が教師の指示によって主体的に行われていることが分かる。
- ・Cの領域で、児童・生徒も、自主的な発言をしていることが読み取れる。

つまり、総合的に今回の授業の特徴をみると、教師の指示により児童・生徒が積極的に発言し、自主的に活動している授業であることが分かる。実際、本授業は、教師の指示により、自主的に活動している授業であったことから、これらの分析結果は頷ける。

このように、授業分析を行うことにより、授業分析結果と授業との間の関係性をみる訓練になる。また、諸外国の授業の分析を行うことにより、我が国の授業の特質や諸外国の授業との差異を体感することができる。



図8 イギリスの授業の推移 (一部)

このことは、今後教師として実践的な力量を付けるためには必要なことである。

本論においてイギリスを例に挙げ行ってきた授業研究を教員養成の実践として「教職リサーチ I」の科目にて行っている。海外教育視察研修初年度のイギリスでの授業アーカイブ及び授業分析・研究の方法をテキストとしてまとめ、そのテキストを活用して授業の分析を行い、講義の中で学生同士が議論を交わし授業研究を行っている。この授業分析・研究を通して教師としての実践的な力量の向上を図っている。

5. おわりに

本稿においては、本学の文化創造学部で取り組んでいる「海外教育視察研修」について、これまでの3カ年の経過をまとめ、報告をした。特に、教師を目指す学生を対象とした実践的な教師力を養成するために、イギリスの授業を多視点同時撮影することにより多視点映像として教材化し、定量分析することで、多視点映像教材の教育利用・研究での活用効果について報告した。

また、授業をデジタル・アーカイブ化し、長期保存を考えた授業アーカイブにおける関連教育資料の構成についても報告した。授業アーカイブとは、単に、授業のビデオを撮影記録することではなく、これらの関連教育資料を総合的に収集・管理・保管することである。今後、学生の授業分析の教材として、国内外の多くの授業をアーカイブし、授業アーカイブとして長期保管することにより、様々な授業を後世にも伝えていくことが可能となる。今後、様々な授業をアーカイブし、教員養成を行う方法を研究する予定である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、学長の後藤忠彦教授にご指導いただき、感謝申し上げます。

参考資料

- (1) 久世他：学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【1】～多視点映像の教育利用・研究での課題～日本教育情報学会 教情研究 EI08-1(2008-06) P15-P21
- (2) 久世他：学習者の目的に応じた多視点映像

- 教材の開発研究【5】—実践的な教師力を養成するための教材研究—日本教育情報学会 教情研究 EI09-3(2009-07) P15-P20
- (3) 久世他：学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【10】—授業研究のための多視点映像教材の開発—日本教育情報学会 教情研究 EI09-5(2009-11) P37-P42
 - (4) 久世他：学習者の目的に応じた多視点映像教材の開発研究【14】—授業研究のための多視点映像教材の開発(2)—日本教育情報学会 教情研究 EI10-1(2010-02) P77-P82